



教育科学

戦後初期に教育科学の建設を
目ざした先駆的雑誌！

本誌は一九四七年七月、同学社に設立された
教育科学研究会(代表・島内淳)が創刊し、
通算30号発行されたが、原本散逸等のため
これまでほとんど言及されてこなかった
「幻の教育雑誌」。その内容は高水準で
戦後初期の教育史研究にとって
決して見逃せない注目すべき資料。

復刻版

梶村光郎監修・解説

教育科学研究会編／同学社発行

全4巻・別冊1

緑蔭書房

監修の辞

梶村光郎

▼琉球大学助教授

本誌は、従来の観念や道徳としての教育研究から教育を科学として捉えて創造していくことを目的として、教育科学研究会(代表島内淳)から一九四七年七月に創刊された教育雑誌である。同学社から、一九五〇年四月までの間に通算で三〇号発行された。

戦後初期の教育科学の建設を目的として発行された教育雑誌としては、城戸幡太郎が教育研修所所長時代に創刊にかかわった『教育』(一九四七年八月創刊、社会社版)とその後継雑誌である『教育』(一九四八年四月再刊)↓五〇年二月終刊、世界評論社版。五一年創刊の国土社版『教育』の前身誌などがよく知られているが、本誌についてはこれまでほとんど言及されてこなかった。いわば、存在すら認められてこなかった『幻の教育雑誌』の一つと言えよう。

本誌の編集方針は、「抽象的な理論や低級な実践記録を排し、偶然的な所論や意見の羅列を避け、われわれの努力のいとなみをさながら誌上に再現しよう」とつとめる。しかも、各号とも適当な問題を中心に特輯し、號を追って一貫した科擧としての新教育の體系たらしめようとしてゐる。「(創刊のことば)」というもので、毎号が特集形式で編集され、かなりきちんと準備された論文や実践記録が掲載されている。

特集のテーマは、「教科課程」、「単元」、「社会科」、「学習指導法」、「問題法と構案法」、「評価と測定」、「小学校と中学校」、「学校経営」、「単元指導」、「生活指導」、「学習指導要領と教科書」、「教育社会学」、「学習心理」、「教科課程構成」、「共同学習」、「精神衛生」、「教育制度」、「科学教育」、「学校計画」、「学級経営」、「カリキュラムの展開」、「ガイダンス」、「教職員の問題」、「用具教科」、「健康教育」、「教育技術」、「現下教育の問題点」、「評価と記録」、「生産教育と地域社会」といったものであり、戦後初期の教育改革に対応した学校教育の諸問題が広く採り上げられている。戦後初期の教育科学の研究の内容と水準を示すものであり、当時の教育改革の実態を教育現場から検討しようとする時、好個の資料となるものである。その意味で、戦後初期の教育史研究にとって見逃せない資料の一つと言える。また、今日の総合学習にとって参考になる論文や実践も多く掲載されており、その点からも注目される資料である。

創刊のことば

教育が思潮のまにまにながされてきた過去をかえりみて、この新時代の教育はどうしても不拔の根をもつたものでなければならぬとおもふ。それには教育の目的と方法とを科学的に設定し、一步一步と堅實に成果を蓄積し、進歩を期待するより外に方法はありえない。恰も自然科學の發達のように。いまこそこの國の教育を科學として創造してゆくべきときである。われわれは教育科學研究會をつくつてこの仕事にあたり、この立場からその主張をしたいとおもつてゐる。およそ教育の理論はかならず心理學的、社會學的な調査や測定や評價の結果を背景としたものでなければならぬとともに、その假説は周密的な實踐によつて検討されねばならない。この理論と實踐、實踐と理論との統一へのささやかな努力のあとを世に問わんとし、敢えて本誌を創刊する。されば本誌は抽象的な理論や低級な實踐記録を排し、偶然的な所論や意見の羅列を避け、われわれの努力のいとなみをさながら誌上に再現しようとする。しかも各号とも適当な問題を中心に特輯し、號を追つて一貫した科擧としての新教育の體系たらしめようとしてゐる。したがつて本誌はその都度よみずてられる性質のものではなく、集大成して教育科學者の行路をしめす道標たらしめたいとおもふ。教育再建をめざす天下の識者、わけても初等、中等教育界の同好の方々の御援助を期待してやまない。

教育科學

創刊號目次

創刊のことば	城戸幡太郎
教育の科學的研究	吉田 昇
教育における能率と管理	依田 新
兒童觀察の課題	澤田 慶輔
新しい考查法の背景	二關 隆美
共同社會學校論	篠崎 徳太郎
兒童の言語生活と調査	淀橋 第四小學校
教育時感	教育科學研究室
兒童生活圏の調査(第一報)	教育科學研究室
家庭における話題の調査	教育科學研究室
個性調査票の問題	教育科學研究室
編集後記	

◆推薦します

今こそ再勉強のとき

上田 薫

▼都留文科大学名誉教授

戦後新教育が始まったのは昭和二十二年の四月だった(私の担当だった社会科は同年九月開始)。戦争から帰った私が文部省に入ってからほぼ半年である。当時の困難な状況は、精神面でも物質面でも今の人がとうてい想像できぬほどのものだったが、実は思いのほか活気に満ちていた。ことに新しい日本人の育成に正面から取り組もうと意気こんでいた教育の世界には、ある意味で条件の似ている現在と比べて、はるかに迫力があつたといつても言いすぎではない。

ただ当時の出版状況は極度に厳しく、熱心な教師たちは手掛かりに飢えきつていた。信頼しうる雑誌はほんのわずかで、新教育を対象とする権威あるものが強く待たれていたのだが、そこに登場したのが、『教育科学』だった。新鮮な上に重厚さが感じられて、すこぶる魅力的だった記憶がまだ新しい。

重苦しかった戦時下の体制から一気に解放されて、希望と責任感にあふれていたのがあの頃だったが、今日も五十五年体制の重圧が消え、混乱低迷を抱えて新しい時代を模索しているという意味で、双方共通するものは大きいのである。現在の学校は『総合』のことに明け暮れている感があるが、本当はかつての新教育こそが総合を根底にした創造的な立場だったのである。いや今の教師が総合的学習と取り組むときのめつも本質的な点で、当時の教室ですでに明確につきつめられ、また実践されていたといつても不当ではないのである。

なぜ今の人たちは戦後新教育を評価しないのか。勉強してみようと思わないのか。はつきり言って、根本に迫ろうとしないその姿勢は少なからず軽薄ではないか。問題解決学習にせよ、あの新教育に立ち帰つてもう一度考えてこそ、未来に実るものが出てこよう。そう考えると、『教育科学』の復刻はまさに時宜を得たものといわなければならぬ。

教育科学

第二十四号目次

特集・教職員の問題

教職論	玖村敏雄
教職の分析	村田忠三
教員の法的地位	安達健二
教員養成大学の問題	岩下富藏
教職と児童理解	阪本一郎
助言指導論	平澤薫
今後の教師現職教育	扇谷尚

ガイダンス組織の実際 愛知一師 男子部附小 鈴 村 國 市 三
 教育文化活動と教員組合 橋 笠 達 雄 語

船木村に於ける 社会実態調査

大 田 堯

一、社会実態調査の目的

我々は教育計画のための社会実態調査を昨年八月から開始している。教育を具體的な社会生活の現実の中から編成してゆくためには様々の角度から、その社会の實情が把握せられ、その社会の日常の無意識的、慣習的な生活の様相が、數的或は記述的に意識化されなければならぬ。けれどもそのような社会生活の日常的な部分はどういうところがかりを経て明かにせられるであろうか。例を我々の日常生活

解決するという明確な目標をもつて行う一種の調査である。社会には我々の社会生活の障害となる様々の生活問題が存在して、これ等の問題を私的問題としてでなく、社会の責任に於て解決しようとするならば、その問題に際關するは、解決を見出す社会の現況が調査せられなくては、解決を見出すことは出来なない。問題のなシチュエーションに於てはじめて調査はその意味をもつてくる。そのことは地域の社会問題を通じてはじめてその地域の實態がとらえ得ると云う結論でもあつた。教育が地域社会の實態の中から編成せられると

活にとるならば、我々の無意識的、日常的な生活、活動が何等かの障害によつてかゝるとき、そこに解決をせまられた問題に遭遇する。この問題を解決するためには過去の生活経験から得た記憶の糸をたどるとともに、現實の事象をはらんでいく諸條件の分析が必要となる。この問題の性質に直而して行く我々の現實分析は、この或る特定の問題については、この或る特定の目標をもつて行う一種の調査である。社会には我々の社会生活の障害となる様々の生活問題が存在して、これ等の問題を私的問題としてでなく、社会の責任に於て解決しようとするならば、その問題に際關するは、解決を見出す社会の現況が調査せられなくては、解決を見出すことは出来なない。問題のなシチュエーションに於てはじめて調査はその意味をもつてくる。そのことは地域の社会問題を通じてはじめてその地域の實態がとらえ得ると云う結論でもあつた。教育が地域社会の實態の中から編成せられると

いうことは、その地域社会の生活問題の中に教育が位置づけられると云うこと以外ならぬ。斯く考へて、教育計画に着手する第一段階は何よりも先ず地域の生活問題をとらえ、それを通じて地域の中で我々が日常意識的に越日して生活事實を數的に或は記述的に明かにすることが必要である。然も計画的に教育の構成をしようとするためには、少くも現在存在する地域の生活問題が總括的にひろい出される必要がある上に、更に將來次々に起つてくる生活問題も池らさず總括的にとりあけられてゆくのでなくては、教育を日々續なる運営にもたらしこむことは出来ない。我々の實地調査は、又實施しつつある社会実態調査は、地域教育編成のためのものであるが、全く同時に地域に存在するあらゆる生活問題自身のためのものである。斯様な性格の調査に於ける教育はその全構成についてのサゼストを受けることが出来る。だから我々の調査は微妙な二重性格の上立っているのであつて、これは社会生活の中で教育が持つている機能上の性格に根拠している。

以上の考察を通じて云へることは、我々の實態調査の目的は、先ず地域教育編成のために土地の生活問題を總括的に展望することである。

◆推薦します

戦後教育の成果をふまえて二一世紀の展望を

大槻 健 ▼早稲田大学名誉教授

戦後教育も半世紀を経てみると、その原点がどこにあったのかとかく見忘れがちになる。ときには故意に「見忘れ」て戦後教育の成果を無視し、「教育改革」と称して、戦前への復帰をたくらむ教育論も出てくる。二一世紀をどう展望するかによって、戦後教育に対する評価が異なってくるのであろう。

復刻版『教育科科学』はそうした混沌状況に一石を投じようとして刊行されたものである。原本の『教育科科学』は一九四七年に創刊されている。私自身、この年から最初の教職についてだけに当時の思い出と深く重なる。戦後の矢継ぎ早の教育改革は、戦前の教育をたっぷりうけてきた私たちにとって目のくらむような華やかさを帯びていた。すでに日本国憲法や教育基本法の条文はあきらかにされていたが、その内実を満たす実践は今後の世代に任されていた。国民主権の新しい教育は生気を帯びて発足したのだった。

一九四七年は六・三制の発足した年でもある。「新制中学校」や「社会科教育」などの新しい概念の登場によって、そのあり方をめぐる論議も盛んであった。若輩の私個人もその驥尾に付して、「二一のものを書いていく。方向性は必ずしも明確ではなかったが、みんながその各々の能力に心じて、未熟ながら新しい教育を創っていく」とする意欲に燃えていたように思う。

『教育科科学』誌は、戦前からのその名の提唱者であった城戸幡太郎先生の論旨にもみられるように、教育の事実に対する認識から出発して、そのあり方を究明していくとする、新しい教育研究の場を提供するものであった。教育を観念や道徳として捉えていた従来の研究に対して、それは新鮮な息吹きを伝え

るものであった。この『教育科科学』誌の精神に教育観は、その終刊後も教育科科学研究会等の民間教育研究団体にひきつがれた。ともすれば戦後教育を清算して「教育改革」を成し遂げようとする動向の中で、戦後教育の初心に帰り、今後の展望に資すのために、復刻版の刊行を心から喜びたい。

□カリキュラムの参考文献□

岡 津 守 彦

カリキュラムの問題が一般の教育界に於て正面から取扱われるようになったのは、極めて最近のことである。考えてみれば、まことに「何を教えるか」ということが学校教育の大部分を決定するものであるが、知らしむべからず、依らしむべしの政治機構の中では、その教育課程がすべて中央の指示にまねばならなかつたことも亦、理の當然であつた。

一、わが國の文献の中でこの方面の参考になるものとしては、僅かに阿部重孝氏の著書二三があげられる位のものではなからうか。即ち、岩波講座「教育科科学」の中に含まれてゐる「學科課程論」と教育改革論（昭和十二年、岩波書店刊）の中に含まれてゐる「學科課程論」、さらに學校教育論（昭和五年、教育研究會刊）の中のいくつ

る最初の科學的研究ではないかと思われ

る。その他、例の新教育が華やかに行われた頃には、特にカリキュラムとは云われなかつたにしても、その領域に含まれる問題を捉えた人々が何人かあつた。即ち、赤井末吉氏、三浦喜雄氏、瀬川頼太郎氏、及川平治氏、木下竹次氏、高山謙氏、寺田彌吉氏等の論文は、その頃の教育雜誌を色彩つたものである。併しそれ等は何れも、カリキュラムが如何なるものであるべきかというような、云はゞ考え方の點に重點がおかれていて、今日吾々が痛切に望んでいるような、カリキュラムの科學的構成方法には大した關心が拂われず、また今日のような切迫した社會的課題を扱うものでもなかつた。その點、今日の教育觀が當時の兒童中心主義的な教育觀から相當な距離をもつようになつていくことを十分に考え合せねばならないであらう。

二、しかし何はともあれ、カリキュラムが本格的な研究の對象とされ、従つてまたそれに関する文獻が最も多く出されてゐるのは、先づアメリカ合衆國であらう。そして現在吾々のこの方面についての關心が、

戦前教育科学運動史料

佐藤広美／高橋智編・解説 戦前の民間教育研究運動の最後の拠り所となった教育科学研究会の機関誌『教育科学研究』と山下徳治編集の『教材と児童学研究』を収録。総力戦体制下の民間教育運動の課題、状況を知る第一級の史料。

●全2巻 本体32,000円〔編集復刻版・A5判上製〕

興亜教育

佐藤広美監修・解説 本誌は、太平洋戦争下のいわゆる「大東亜共栄圏」の教育の理論や政策を論じ、当時の日本やアジア各地の教育事情を詳しく報じた雑誌。日本植民地教育の絶頂期の言説を示す中核資料である。今回小社は『興亜教育』とその改題誌『教育維新』全39冊を完全収録した。

●全8巻・別冊1 本体140,000円〔復刻版・A5判上製〕

教育新聞

梶村光郎監修・解説 志垣寛主宰の本紙は、戦後いち早く発行された教育関係の新聞の一つ。教育新聞社より昭和20年から22年まで通算71号刊行された。戦後初期の教育状況を克明に報道した貴重な新聞。

●全1巻 本体26,000円〔復刻版・A4判上製〕

國語創造

梶村光郎監修・解説 志垣寛主宰の本誌は、戦後いち早く発行された国語教育雑誌。昭和21年から24年まで全13冊刊行され、戦後初期に推進された民主的な国語教育の状況を伝えた。戦後国語教育史研究・生活綴方教育史研究等に不可欠の文献。

●全2巻・別冊1 本体36,000円〔復刻版・A5判上製〕

資料日本の戦後教育改革

佐藤広美編・解説 本書料は『松本喜美子資料』の中核であるIFELの実態資料と神奈川の新教育の実践資料を中心に編纂。昭和20年代から30年代初めの戦後教育改革実施期における各種の解説書、報告書、会議記録など珠玉の史料満載。

●全5巻 本体100,000円〔編集復刻版・B5判上製〕

農村教育研究

小林千枝子監修・解説 大西五一を中心に下中弥三郎、江渡狄嶺、上田杏村など多数の教育実践家が参加した農村教育研究会の「研究雑誌」である。当時の政治・教育思想を知るための不可欠の文献。原本の所蔵機関はわずかで全巻揃いの所はない。

●全3巻・別冊1 本体57,000円〔復刻版・A5判上製〕

戦後初期の新教育の実態や教育科学運動の解明に貴重な史料

教育科学

教育科学研究会(代表・島内淳)編

同学社発行

昭和22年7月創刊→昭和25年4月終刊(全30冊)

復刻版刊行概要

梶村光郎監修・解説

全4巻・別冊1 (別冊には解説・総目次・執筆者名索引を収録)

A5判・上製クロス装・ケース入り

揃定価[本体68,000円+税](分売はいたしません)

ISBN4-89774-507-1 C3037

12	8	4	9	4	11	8	7	6	4	1	8	7	5	4	1	12
私立学校法公布	『教育現実』(教育文化研究会)創刊	『実践国語』(飛田多喜雄編集)復刊	『新しい中学校』(全日本中学校長協会)創刊	『教育生活』(新世界社)創刊	『新しい教育と文化』(日本教職員組合)創刊	『教育』(社会社版)創刊、翌年四月より世界評論社版として受け継ぎ、五〇年終刊	『教育』(社会社版)創刊、翌年四月より世界評論社版として受け継ぎ、五〇年終刊	『教育科学』(教育科学研究会・代表島内淳)同学社より創刊→五〇年終刊								

戦後初期の教育雑誌を中心とした関連年表

1945・12 全日本教員組合(全教)結成、全日本教育者組合(日教)結成

1946・1 『教育新聞』(教育新聞社)創刊→四七年終刊
『教育文化』(目黒書店)創刊 ※本誌は『教育維新』の後継誌

『民主教育』(日本経国社)創刊
『國語創造』(教育新聞社)創刊→四九年終刊
『明るい学校』(民主主義教育研究会)創刊
教育刷新委員会(教刷委)設置
1947・1 『国語文化』(国語教育協会)創刊

六三制発足
日本教職員組合(日教組)結成
『教育科学』(教育科学研究会・代表島内淳)同学社より創刊→五〇年終刊
『教育』(社会社版)創刊、翌年四月より世界評論社版として受け継ぎ、五〇年終刊
『新しい教育と文化』(日本教職員組合)創刊
『教育生活』(新世界社)創刊
新制高等学校発足
1948・2
1949・4

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

特約書店

2000.7.上.5